

## 第6章 まとめ

### 第1節 古墳時代以前の門前上屋敷遺跡周辺の集落形態

#### 1 縄文時代の落とし穴群

門前上屋敷遺跡では、これまでの調査で計11基の落とし穴が検出されている。配列状況が明確なものは、土坑49・50が約5m、土坑56・57が約5m、土坑58・59が約8mの間隔で土坑51・55へ連続すると考えられ、さらに、間を置き約5mの間隔をもつ土坑4・5に蛇行しながら繋がりおよそ南北方向へ延び、2基1対の列状配列になると考えられる。対の間隔は、15～35m程度と推定される。土坑3は列からは離れており、単独で存在する。これらの時期は、土坑3から縄文時代前期末（大歳山式）の遺物が出土している他、晩期の遺物が3・15区で出土しており、列状配列になるものは晩期ごろの可能性もある。県内において、落とし穴2基1対の列状配列は笠見第3遺跡、化粧川遺跡などでも確認されている（前島2004、小谷2005）。門前第2遺跡のように、部分的に対となるが単独のものが3～15m間隔で列状に配列されているものもあり、門前地区周辺の調査は、丘陵から段丘上の狩猟形態を探るうえで重要な調査例である。

#### 2 弥生時代中期から古墳時代の集落形態

名和川の形成する河岸段丘上にある門前上屋敷遺跡では、弥生時代中期（Ⅱ-3様式期）に、計5基の竪穴住居跡、3基の貯蔵穴が検出されている。竪穴住居2には外周溝が約2m離れて巡り、多角形住居で他に比べて規模的にも大きく、有力層の住居の可能性もある。これら住居の配列を見ると、広場の周囲に竪穴住居1・6・5・4が半環状に配列され、居住域から離れて貯蔵穴と考えられる土坑9～11が集中している構造となる。また、この時期の集落は焼失しているものがあり、住居1・貯蔵穴群で炭化物が検出され、居住域の一角（北西側）が類焼している可能性がある。名和川を挟んで隣接する名和飛田遺跡では、若干早く小規模な集落が形成され（Ⅱ-2様式期）、上屋敷と同時期では小集落が造営されている。

後期前葉（Ⅱ-1様式期）になると小型の竪穴住居7・8が営まれている。調査した範囲では、中期後葉集落と後期前葉集落は居住域を異にし、集落規模も住居規模も縮小傾向にある。この傾向は、名和飛田遺跡でも確認できる。

後期後葉（Ⅱ-3様式期）になると、周辺では丘陵上の門前第2遺跡で集落が営まれるようになり、段丘上での集落はほとんど認められなくなる。

古墳時代前期前葉（天神川期）になると、段丘上に再び門前上屋敷遺跡で小集落が現れ、古墳時代後期になると名和飛田遺跡で、4基の竪穴住居と外周柱穴列を持つ大型掘立柱建物が見られる。

#### 3 集落移動の要因

このように、門前地区周辺では弥生時代中期から古墳時代後期にかけて断続的に集落が造営され、弥生中期までは低地にあったものが弥生後期になると丘陵上へ移り、その後再び低地へ戻る。似たような現象は、鳥取県内においても東郷池周辺域、加勢蛇川周辺域、淀江平野周辺域でも見られる現象である。門前地区の集落遺跡の出土遺物には、武器類等はほとんど認められず、瀬戸内・近畿地方で見られるような争乱状態を示すものではないといえよう。濱田によると山陰地方においては弥生時代中期から後期にかけての集落立地と動態については、遺跡数の増加と相関して丘陵上に集落が営まれ

るようになると考察し（瀨田 2006）社会的緊張関係による集団の移動等は認められないとしており、今後更に検討を要する問題であろう。（牧本）

【参考文献】

- 前島ちか 2004 「笠見第3遺跡の落とし穴について」『笠見第3遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 86  
小谷郁夫 2005 「化粧川遺跡の落とし穴配列について」『化粧川遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 98  
瀨田竜彦 2006 「山陰地方における弥生時代集落の立地と動態 大山山麓・中海南東岸地域を中心に」『古代文化』第58巻第 号

## 第2節 古代末から中世前期の門前上屋敷遺跡の集落形態

### 1 古代末

門前上屋敷遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての遺物が比較的まとまって出土している。出土する範囲は、15区西側の丘陵斜面側に集中している。9～10世紀ごろと考えられる段状遺構1・2と、それに伴う掘立柱建物5・6が存在することから、丘陵斜面部をテラス状に加工した段に建物が伴う集落が作られていたと考えられる。

11～12世紀代には、段丘上で1次調査で検出されていた溝8がある。東側に傾斜しており排水を主とした大規模な溝である。当初は、この溝も屋敷地を区画するものと考えられていたが、今回の調査で時期的に遡ることが判明し、時期・性格を考え直す結果とはなったが、否定はできない。また、門前鎮守山城跡で小鍛冶関連施設である段状遺構6がみられるとともに、遺跡内では輸入陶磁も出土しており、有力層を含む居住域と工業生産域（小鍛冶）を併せ持つ集落の存在が窺われる。

### 2 中世前期

12～14世紀になると、本格的に段丘上に遺構が現れる。溝9は、浅い箱堀状のもので外側に土塁状のものが築かれていた可能性があることが判明した。溝8の機能停止後に新たに掘られたものである。溝9に直交する大規模な柵列や溝3の存在から、東西約30m、南北約40mの屋敷地を区画したものと考えられる。明瞭な方形区画ではないが、小都分類によればa1類の屋敷に相当するものと考えられる（小都 2004）。この区画に確実に伴う建物は検出されていないが、区画外には掘立柱建物4、やや離れて頻繁に建て替えが行なわれている掘立柱建物7～11、門前鎮守山城跡石組井戸・石敷き遺構などが伴うものと考えられる。

同時期には、  
・ 層からの出土遺物の中には輸入陶磁器がまとまって出土しており、有力者層の存在を窺うことができる。

屋敷地は、15世紀代には耕作域に変化しており、有力者層は解体したか近辺の別の場所に移動しているものと考えられる。また、包含層中では大量の椀形鍛冶滓、鉄器（鍛造品・鋳造品）が含まれており、ごく近辺に鍛冶関連の施設の存在が推察される。

門前上屋敷遺跡は、当該期においては大規模な屋敷地の存在、まとまった輸入陶磁器の出土など、集落内に有力者層の存在が窺われ、前時期同様集落内に工業生産域（鍛冶関連施設）をもつ集落像を描くことができよう。ただし、鉄滓の出土量は前時期に比べて圧倒的に多く、生産規模はかなり向上していたものと推定される。（牧本）

【参考文献】

- 小都 隆 2004 「中世城館跡の型式分類」『考古論集（河瀬正利先生退官記念論文集）』

## 第3節 門前上屋敷遺跡からみた中世田畠の様相

### 1 田畠の特徴

門前上屋敷遺跡では、古代から中世前期にかけて集落が営まれた後造成が行われる間、およそ15世紀代に田畠が良好な状態で検出されている。

県内では、中世の耕作跡は長瀬高浜遺跡・畑ヶ田遺跡・上伊勢第1遺跡・錦町第1遺跡・茶畑六反田遺跡等で畠跡が検出されている。水田は、畑ヶ田遺跡で可能性はあるものの確実な水田跡の検出は初例である。

検出された2面の水田は、緩やかな斜面部を段状に掘削して作られており、約70cmの高低差がある。いずれも一辺約10m程度の方形の小区画に復元でき、周囲に畦その外に溝が切られている。耕作面はほぼ水平になっている。畠は、遺存状態のよい畠2が新しく、畝間のみ検出された畠3は時期的に遡り、休耕していた可能性がある。また、大畦畔1を境に、畠1・2と畠3の畝方向が異なることから、栽培作物又は耕作者の違いがあったものと考えられる。

これらは同時存在していたのではなく、長瀬高浜遺跡でも確認されているが、遺存状態の悪い畠の存在から耕作、休耕を繰り返していたものと考えられる。

### 2 立地的特徴

門前上屋敷の田畠は河岸段丘上で検出されたものである。これまで検出されている遺跡は、低地部にあり飛砂によってパックされた状態で検出されているものと丘陵上で耕作痕として認識されたものである。門前上屋敷遺跡の場合は、造成行為によってパックされたため通常検出できない畝まで遺存した特異な例である。当遺跡では、段丘上でも4・11・16・17区でも耕作痕が検出されているが、段丘平坦面上の9区以下では水田遺構は検出されていないため、水田の立地は比較的標高が高い斜面部に限られていた可能性があり、平坦部は集落とそれに近接して畠が営まれていたものと考えられる。

### 3 牛の使用

水田1の南西側畦に偶蹄目の足跡が検出されている。直径が約13cm前後であり大きさからすると牛の可能性が高い。県内では、長瀬高浜遺跡の13～15世紀代の畠跡や後背湿地上、錦町第1遺跡で確認されている。長瀬高浜遺跡では、休耕地において放牧されていた可能性が指摘されている。当時としては、労働力としての牛馬の使用はかなり普及していたものと考えられる。

### 4 栽培作物の復元

水田2・畠3で土壌分析を行った結果、いずれからもイネのプラント・オパールが高率で検出され、畠においてもイネが栽培された可能性が指摘された。しかし、施肥等で稲藁が使用された可能性もあり、ただちに畠での稲作は肯定し難いものがある。形態的に異なる耕作地は、基本的に栽培作物の違いによる現象であり、門前上屋敷遺跡のように同時並存する場合はおのずと作物によって耕作地が使い分けられたと考えてよいであろう。当該遺跡の畠地での稲作は否定的であり、ソバ花粉、ムギのプラント・オパールが検出されていることから、これらの栽培が行われていた可能性が高いと思われる。時期的には遡るが12世紀代と考えられる溝8内においても、炭化したコメ、アズキ、ムギなどの種実が出土しており、中世の農業の様子を復元できる資料として重要である。(牧本)

## 第4節 15・16世紀の門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡

### 1 大規模造成

この時期には、門前上屋敷遺跡では大規模（高さ1.6m以上、面積757.7㎡以上）な、宅地に伴う造成が行われている。造成法面には、粗雑ではあるが地山自然礫を用いて石垣状の施設を設けている。残念ながら、造成上面は近世以降の削平が及び、主要な建物は検出できなかった。

しかしながら、柵又は塀を伴う重複する掘立柱建物が検出されていることから、この造成上には更に多くの建物が存在していたことは確かである。その性格として考えられる手がかりとしては、門前鎮守山城跡で検出された土坑15からまとめて出土した墨書土器がある。この墨書土器は、中森分類坏B類に当るもので、15世紀ごろのものと考えられる。坏側面又は底面に一文字ずつ墨書されており、「普」3点、「率？」1点、「土」1点、「祖」1点、「佛」1点、文字不明6点である。これらは、一文字のみで意味を持つものではなく、組み合わせで経典などの何らかの一文を示す可能性がある。可能性としては、「普天率土、佛祖普・・・」などの文章が考えられよう。また、墨書土器は土坑15以外からも出土しており、造成石垣遺構上で廃棄された状況で検出された「普庵」、造成土中で検出された「智光」と書かれた土師器坏がある。いずれも15世紀代と考えられ、僧侶又は建物を連想させるものであることから、15世紀代の造成に伴う建物等は、寺院に関連する可能性が高いと思われる。さらに、造成土上面及び周辺では、輸入陶磁器がまとめて検出されており、所有者層の地位の高さを窺うことができよう。

造成の前面の段丘上平坦面には、掘立柱建物1・2・16～18などの建物があり、集落を形成していたものと考えられる。

### 2 土塁・堀切の存在

門前上屋敷遺跡の後背部丘陵上には、堀切・土塁をもつ門前鎮守山城跡がある。この遺跡は、15世紀代に機能した可能性がある。土塁・堀切以外に防御施設は認められず、出土遺物もほとんどないことから、小都分類による砦（類Bb2）に相当する。しかし、立地的・規模的には防御施設として考えるのは困難であり、結界としての意味合いのほうが強いと考えるのが妥当であろう。

また、丘陵斜面部には14～16世紀ごろに段状遺構が作られており、明確な性格は不明な点が多いが、防御施設の前身あるいは土塁・堀切に伴う付属施設である可能性は残ろう。おそらくは、門前上屋敷に作られた寺院及び集落に関係する、一時的な避難場所としての性格が考えられる。

### 3 社会背景からみた遺跡の性格

この時期の社会背景として、室町時代後期は西伯耆でも尼子氏、山名氏等の戦国大名による争乱期に当り、各集落の背後の丘陵を利用して、このような一時退避的な施設が作られていた可能性がある。今後、資料の増加を待って集落ごとの防御施設の様相を明らかにする必要がある。また、門前集落の名称として、寺院の存在が地名として残っていた可能性があったが、今回の発掘調査によってこのことが裏付けられるものといえる。（牧本）

#### 註・参考文献

- (1) 鳥取県立博物館石田敏紀氏の御教示による。  
 (2) 小都 隆 2004「中世城館跡の型式分類」『考古論集（河瀬正利先生退官記念論文集）』



第288図 15・16世紀の門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡遺構配置図

## 第5節 鉄関連遺物からみた古代末から中世前期世紀の門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡

### (1) 門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡の鉄関連遺物

門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡では、比較的まとまった状態で鉄関連遺物が出土している。

門前鎮守山城跡では、放射性炭素年代測定で11～12世紀代と推定された丘陵斜面部にある段状遺構6で、椀形鍛冶滓、粒状滓、鍛造薄片、鞆羽口、金床石片等が出土しており、小鍛冶が行われていた可能性が高いことが判明した。この遺構を掘削する段状遺構5からも、段状遺構6からの転落遺物と考えられる椀形鍛冶滓、小型鉄鎚が出土している。また土坑10からは完形の鑄鉄製鍋が出土している。この土坑は出土土器から八峠編年中世 期、13～14世紀と考えられる。

門前上屋敷遺跡からは15区中世遺物包含層中で大量の鉄関連遺物が出土している他平成16年度調査区においても鉄滓等が出土している。包含層出土のため確実な時期は求められないが、13～15世紀のものであり、鉄滓形状の特徴からも中世的と指摘されている。当遺跡では、小鍛冶段階で生成された椀形鍛冶滓等の出土もさることながら、鍛造品の種類・量が多く、遺跡近辺でかなりの規模で鉄器が生産されたものと考えられる。

時期的には門前鎮守山城跡段状遺構6のものが古く、同時期では段丘上の門前上屋敷遺跡で大規模な区画溝に仕切られた屋敷跡及び付属する掘立柱建物群が作られている。鍛冶遺構は、集落域からやや離れた位置に作られていることになる。

また、13～14世紀には門前上屋敷遺跡のごく近辺には、この時期の鍛冶関連施設が、丘陵裾部付近に存在している可能性が高く、鉄器生産を行えるだけの経済基盤を持った集落の存在が窺える。

門前鎮守山城跡土坑10から出土した鑄鉄製鍋M3は、受口状口縁をもつもので五十川氏による鉄鍋A類に分類できる。本来底部に認められるべき湯口は確認できず、整形されている可能性がある。ほぼ同時期の門前上屋敷遺跡からも、鑄鉄製鉄鍋片が多数出土しており、この中には、土坑10出土と同様鉄鍋A類に分類できるものも見られ、鑄造品も相当数生産されていた可能性がある。

### (2) 鳥取県内の中世鍛冶の様相

伯耆地方は、中世以降年貢鉄を貢納した荘園が文献で認められている地域で、鉄生産及び流通が盛んであったことが知られている。鳥取県内では、現在のところ製鉄関連の遺跡は調査されていないが、近年古墳時代から中世にかけての鍛冶関連遺構の調査例が増加しつつあり、中世段階では、確実な遺構を伴うものは円護寺坂ノ下遺跡、大河原遺跡と少ないが、南原千軒遺跡、霞牛ノ尾遺跡などで多量の鉄滓等が出土し、大規模な鍛冶関連遺跡として認識されている遺跡がある。

中世段階の門前上屋敷遺跡は、当時の鉄生産流通体制の下で獲得した素材を元に、集落内で鉄器を生産していたものと考えられる。当時においては、鉄器生産はどの集落も行えるものではないと考えられる。周辺は、同時期の名和氏関連の旧蹟が多く存在する場所でもあり、当遺跡が同氏と深い関係を持っていた可能性は否定できないであろう。(牧本・穴澤)

#### 【註・参考文献】

- (1) 穴澤義功氏の御教示による。
- (2) 五十川伸也 1992「古代・中世の鑄鉄鑄物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集
- (3) 福田豊彦 1996「文献からみた鉄の生産と流通」『季刊考古学』第57号

8区 土坑29	鉄製品 (鍛造品)	8区 P 484	15区 V層	15区 柱穴・掘立柱建物	15区 土坑67	15区 畠3	15区 土坑61	15区 柵列6	15区 P 490
鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	羽口 (鍛冶)	鉄冶滓 (含鉄)	鉄製品 (鍛造品)	椀形鍛冶滓 (極小)	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	鍛冶滓
錆化(△)	錆化(△)	錆化(△)		錆化(△)	錆化(△)		錆化(△)	錆化(△)	
1	8	4	12	15	22	27	31	32	35
8区 掘立柱建物1	9区 掘立柱建物18	8区 V層	15区 遺構外	鉄製品 (鍛造品)	23	28			15区 掘立柱建物12 椀形鍛冶滓 (小)
鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	鉄製品 (鍛造品)	流動滓 (含鉄)	錆化(△)	24	鉄製品 (鍛造品)			
錆化(△)	錆化(△)	錆化(△)	錆化(△)			錆化(△)			
2	9	5	13	16					36
8区 掘立柱建物2	12区 遺構外	6	15区 遺構外	17	鉄製品 (鍛造品)	29		15区 掘立柱建物12 椀形鍛冶滓 (極小)	15区 柱穴56 椀形鍛冶滓 (極小)
鉄製品 (鍛造品)	青銅塊		鉄製品 (鍛造品)	18		鉄製品 (鍛造品)			
錆化(△)	L(●)		錆化(△)	19					
3	11	7	14	20	25	30			37
				21	26				鉄製品 (鍛造品)
									錆化(△)
分析									38

9、12、53、54、55、83、84、85、101はS = 1/4。他はS = 1/2

第289図 門前上屋敷遺跡鉄関連遺物構成図

15区 掘立柱建物13		15区 掘立柱建物14		15区 段1・2		水田1・2、畠1～3			
15区 掘立柱建物13 榎形鍛冶滓 (極小)	39 	15区 掘立柱建物14 鉄製品 (鍛造品)	44 	15区 段1・2 榎形鍛冶滓 (極小)	56 	流動滓	66 	73 	79 
榎形鍛冶滓 (極小)	40 	15区 P 487 榎形鍛冶滓 (極小)	48 	15区 2層 榎形鍛冶滓 (中)	57 	61 	67 	H(O) 	80 
鉄製品 (鍛造品)	41 	15区 段1・2 榎形鍛冶滓 (中、含鉄)	49 	榎形鍛冶滓 (中)	58 	62 	68 	鉄製品 (鍛造品)	81 
錆化(△)	45 	15区 段1・2 鉄製品 (鍛造品)	50 	榎形鍛冶滓 (中、含鉄)	54 	63 	69 	錆化(△)	82 
錆化(△)	42 	15区 段1・2 錆化(△)	51 	鍛冶滓 (含鉄)	64 	64 	70 	鉄製品 (鍛造品)	83 
鉄製品 (鍛造品)	43 	15区 段1・2 錆化(△)	55 	鍛冶滓 (含鉄)	65 	65 	71 	錆化(△)	84 
錆化(△)	46 						72 		

第290図 門前上層敷遺跡鉄関連遺物構成図





表44 門前上屋敷遺跡鉄関連遺物観察表(1)

構成No	報告書No	挿図	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	X線
						長さ	幅	厚さ					
1	M 3	第25図	鉄製品(鍛造品)釘	8	土坑 39	3.1	1.2	0.7	2.2	2	錆化( )	酸化土砂に覆われた釘の体部から足部にかけての破片。横断面形は方形。頭部は欠落する。上面には横方向に木部の痕跡を残す。	
2	M 1	第18図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	8	掘立柱建物 1	4.2	1.7	1.3	13.4	2	錆化( )	酸化土砂に覆われた棒状不明品。頭部は平頭で、横断面形は方形と推定される。足部先端はわずかに欠落か。	
3	M 2	第19図	鉄製品(鍛造品)薄板状不明品	8	掘立柱建物 2	2.7	3.0	0.3	8.3	3	錆化( )	幅2.2cmほどの薄板状不明品。一見、鎌状ながら、背側と厚部の区別ができない。厚みは1.7mm前後で、ヘラ状の鉄製品となる可能性大。	
4	M 4	第31図	鉄製品(鍛造品)小釘	8	P 484	4.2	0.5	0.5	0.8	1	錆化( )	不整形の頭部をもつ小釘。足部先端は角錐状に小さく絞られている。体部で二片に割れる。	
5	M 5	第32図	鉄製品(鍛造品)釘?	8	包含層(1層)	2.9	1.0	1.0	21.4	1	錆化( )	酸化土砂に覆われた釘体部状の鉄製品破片。頭部と足部側を欠いている。横断面形は方形か。	
6	M 6	第32図	鉄製品(鍛造品)釘状不明品	8	包含層(1層)	2.5	1.0	0.7	1.4	2	錆化( )	体部から頭部を欠く釘状不明品破片。両端部に小破面が露出し、断面形は丸棒状となる。径は上手側端部で3mm。	
7	M 7	第32図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	8	包含層(1層)	2.1	1.3	1.0	4.5	3	錆化( )	厚い酸化土砂に覆われた棒状不明品破片。破面には径4mmほどの方形棒状の鉄製品の痕跡を残す。	
8	M 8	第32図	鉄製品(鍛造品)板状不明品	8	包含層(1層)	5.4	3.2	1.3	21.4	4	錆化( )	表裏面が厚い酸化土砂に覆われた薄板状の不明品破片。厚みは1.5mmほどで、長軸方向にも短軸方向にも反り返っている。上面上手側は一段小高くなっており、口縁部は幅7mm、厚さは4mm前後。何らかの容器状の鉄製品の口縁部か。	
9	M 153	第208図	鉄製品(鍛造品)馬具	17	掘立柱建物 18	16.2	1.8	1.2	85.2	2	錆化( )	馬具の轡から引手にかけての一括品。左右で別の部品となり現状は四つに分かれている。引手側は環状に巡らせた鉄部を鍛接し、となっているが磁着が強く、芯部は含鉄部を十字状に延ばしている。土坑出土品で、墓坑であった可能性も残る。	
11	M 11	第82図	青銅塊	12	遺構外	1.6	2.4	1.2	8.5	1	L( )	各面に凹凸の残る青銅塊。上面の小さな凹凸は青銅製品本来の文様の可能性あり。下手側と左右が薄くなって延びており、容器状となる可能性あり。この場合には口唇部の上面に文様をもつ小型容器状となり、比較的高級品か。体部の厚みは3.5mmを測る。	
12	C 12	第147図	羽口(鍛冶)	15	包含層(1層)	8.3	7.2	1.0	133.0	2	なし	鍛冶羽口の先端部寄り破片。先端部外面は黒色ガラス質に溶化している。通風孔部の径は2cm強と比較的大ぶり。体部の最大厚みは2.5cm。胎土は粗粒やスサをわずかにまじえる粘土質。	
13	M 84	第149図	流動滓(含鉄)	15	遺構外	2.0	3.6	1.7	12.8	5	錆化( )	扁平な流動滓の側部破片。左右の側部と上手側が破面となる。外周部は溶となっているが磁着が強く、芯部は含鉄部と推定される。緻密な滓質の中型から小型の椀形鍛冶滓、側部片の可能性もあり。	
14	M 83	第149図	鉄製品(鍛造品)刀子	15	遺構外	1.0	1.3	0.4	1.1	2	錆化( )	表面に長軸方向の木質を残す刀子基部の小破片。刀子としての最大幅は8.5mmほど。木質は緻密。	
15	M 102	第164図	鍛冶滓(含鉄)	15	柱穴 55	1.7	2.5	1.1	6.4	3	錆化( )	酸化土砂に覆われた小塊状の鍛冶滓。外見上は上面が扁平気味で、側部が丸みをもった形状を示す。下面の中央部は左右方向に突出する。	
16	M 91	第160図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	掘立柱建物 13	1.5	0.7	0.6	0.5	1	錆化( )	芯部が中空となった棒状不明品。両端部が破面となる。横断面形は不明で鉄製品の径は2.5mm強と細い。	
17	M 98	第161図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	掘立柱建物 14	2.3	1.0	1.0	1.4	2	錆化( )	両端部が破面となった棒状不明品破片。上手側には方形断面の破面が現れ、下手側には扁平な端部が露出する。上手側の径は約3mm。	
18	M 97	第161図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	掘立柱建物 14	2.6	0.6	0.7	0.8	1	錆化( )	両端部が欠落した棒状不明品破片。芯部は小さな円形に抜けており、鉄製品自体の横断面形は円形か。外周部には皮膜状の酸化物が取り巻く。	
19	M 103	第164図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	柱穴 55	2.5	1.4	1.2	4.0	2	錆化( )	勾玉状の外形をもつ。外周部に厚い酸化土砂の付着した棒状不明品。鉄製品自体の破面が全く確認されない。何らかの鉄製品の側部片か。	
20	M 100	第161図	鉄製品(鍛造品)刀子?	15	掘立柱建物 14	1.6	0.8	0.5	0.8	2	錆化( )	両端が欠落した扁平な刀子状の鉄製品破片。厚みは2mm前後で、最大幅は8mm強。上手側には細かい鍛冶痕が走り、下手側の破面には背側と刃部倒らしき痕跡を残す。刃部は途中で欠落する。	
21	M 104	第164図	鉄製品(鍛造品)刀子	15	柱穴 55	2.2	0.8	0.3	3.0	2	錆化( )	左右の端部が破面となった刀子の基部から刃部にかけての小破片。右端部は幅3mm強。左端部は扁平で幅9mmを測る。表面には瘤状の酸化土砂あり。	
22	M 111	第168図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	土坑 67	1.6	0.6	0.6	0.9	2	錆化( )	方形断面をもつ棒状不明品破片。上手側の径は約4mmを測る。下手側の側部はやや狭まってきており、端部は欠落する。	
23	M 112	第168図	鉄製品(鍛造品)鎌?	15	土坑 67	5.9	1.2	0.9	8.5	2	錆化( )	酸化土砂に覆われた鉄鎌様の鉄製品の体部から足部にかけての破片。鎌の先端部と側部は欠けている。横断面形は部位により異なる。	
24	M 108	第168図	鉄製品(鍛造品)円盤状不明品	15	土坑 67	3.0	2.7	0.7	4.4	2	錆化( )	厚さ2mm前後を測る円盤状の鉄製品破片。軸穴の痕跡はなく、側部三面が破面となる。外周部の径は小ぶりで紡錘車とは断定できない。表裏面で荒れ方が異なり、表面の方が平滑。	
25	M 109	第168図	鉄製品(鍛造品)鍋(口縁部)	15	土坑 67	2.2	2.9	1.3	7.1	2	錆化( )	やや内傾した平縁となる鉄鍋口縁部破片。口唇部の最大幅は約7mm。体部の厚みは3mm強を測り、体部は斜めに傾斜する。	
26	M 110	第168図	鉄製品(鍛造品)鍋(体部)	15	土坑 67	2.3	3.6	1.6	11.8	2	錆化( )	放射割れの激しい、酸化土砂に覆われた鉄鍋体部破片。厚みは4mm前後と推定される。下手側端部がやや内側に曲がっており、鍋とすれば体部から底部にかけての破片となる。	
27	M 46	第137図	椀形鍛冶滓(極小)	15	畠 3	3.9	4.3	2.6	47.8	4	なし	左側の肩部と下手側の側部の一部が欠落した 極小の椀形鍛冶滓。上面は平坦気味で、下面は左右方向に突出する舟底状。右側部の中央付近も破面の可能性が高い。	
28	M 50	第137図	鍛冶滓	15	畠 3	3.5	2.3	1.0	9.1	4	なし	扁平な鍛冶滓片。上下面が生きており、右側部が破面となる。薄く広がった滓で滓量の少ない時に生成か。	
29	M 42	第136図	鉄製品(鍛造品)大型釘?	15	畠 3	9.4	3.4	2.6	76.0	4	錆化( )	厚い酸化土砂に覆われた大型の釘状不明品。上面の中央部には平坦面を持つ体部が露出し、下手側は側部が突出する。上手側は短く上方に折れ曲がっているが、これは酸化土砂による腐か、釘としての径は1.1cm前後。梗状となる可能性もある。	
30	M 41	第136図	鉄製品(鍛造品)鍋(底部)	15	畠 3	9.8	6.9	2.8	157.0	4	なし	上下面を厚い酸化土砂に覆われた鉄鍋の底部破片。側部は全面破面となる。右側は円弧状の平面をもち、体部への立ち上り部を示す。これから推定すると比較的小ぶりの鍋底で、厚みは2.5mmと薄い。	
31	M14-16	第119図	鉄製品(鍛造品)刀(別の刀子と刀片が付着)	15	土坑 61	36.7	5.0	2.5	532.0	5	錆化( )	三片に割れている刀。幅広のわりに刃部の短い刀で、中世的な特色をもつ。身幅は2.9cm前後、背幅は約5mmを測る。外周部には木部が残り鞆入りとなる。切先はやや丸みを持っている。鞆の厚みは体部中央で4mm強を測る。鞆の外周部に沿って、刀子の可能性をもつ別の鉄製品が、わずかに軸をずらして乗っている。身幅は約1.4cm、厚みは3mm弱。刃部がやや丸みをもつ。また別に、刀の背側から斜めに立ち上がるような別の刀片らしき突出部をもつ。幅は3cm前後。長さは現状で7.5cm前後を測る。	
32	M 89	第158図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	櫛列 6	3.0	1.7	1.5	5.9	2	錆化( )	酸化土砂に覆われた棒状不明品破片。下手側には破面が露出し、断面形が径4.5mmの方形となる。芯部が抜けてしまっている。	
33	M 90	第158図	鉄製品(鍛造品)釘	15	櫛列 6	4.5	1.1	0.9	5.1	2	錆化( )	わずかに頭部を残す、ほぼ円形に近い釘。頭部はわずかに屈曲し、側部先端は欠けている。横断面形は方形。	
34	M 13	第111図	椀形鍛冶滓(極小)	15	掘立柱建物 7	4.7	2.7	2.2	36.4	3	なし	側部三方が破面となった極小の椀形鍛冶滓破片。上面は皿状に窪み、下面が椀形に突出する。本来の滓主体部は上手側。	

表45 門前上屋敷遺跡鉄関連遺物観察表(2)

構成No	報告書No	挿図	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	X線
						長さ	幅	厚さ					
35	M 113	第169図	鍛冶滓	15	P490	2.5	1.9	1.9	7.2	2	なし	左右の側部と下手側が破面となった鍛冶滓。上面は木炭痕の残る波状で、上手側の側部は椀形となる。下面治いがやや磁着が強い。	
36	M 88	第157図	椀形鍛冶滓(小)	15	掘立柱建物12	3.4	2.2	1.7	17.4	1	なし	緻密な滓質の小型の椀形鍛冶滓の側部片。上面と側面の一部が生きており、側部四面が破面となる。やや流動状で、下面左上手に灰色に被熱した鍛冶炉の炉床土が固着する。	
37	M 106	第165図	椀形鍛冶滓(極小)	15	柱穴56	3.0	1.5	1.7	8.5	2	なし	不規則な凹凸や小破面に覆われた極小の椀形鍛冶滓片。上面と右側部から下手側にかけて生きており、左側部が主破面となる。滓質は二種類が混在し、一方が緻密な青光りする滓部で、もう一方が半流動状の錆色の強い滓部となる。	
38	M 105	第165図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	柱穴56	3.2	1.2	1.0	4.7	2	錆化( )	酸化土砂に覆われた棒状不明品。下手側が破面で、芯部が抜けて方形の空洞となる。径は4.5から5mmを測る。	
39	M 95	第160図	椀形鍛冶滓(極小)	15	掘立柱建物13	2.7	2.4	2.1	15.2	2	なし	側部二面が破面となった極小の椀形鍛冶滓片。上面と上手側の側部が生きており、表面にはわずかに木炭痕あり。滓質は緻密ながら微細な気孔あり。	
40	M 96	第160図	椀形鍛冶滓(極小)	15	掘立柱建物13	2.8	2.2	2.3	20.0	1	なし	緻密な椀形鍛冶滓の中核部破片。下面中央部と上面の一部のみが生きており、全体がシャープな破面に囲まれている。破面には気孔がわずかに露出する。	
41	M 92	第160図	鉄製品(鍛造品)釘又は鉄鏝	15	掘立柱建物13	2.6	0.6	0.5	1.5	2	錆化( )	上手側端部が破面となった釘または鉄鏝。体部には幅1.5cmほどの範囲で横方向の木質が残る。上手側端部の横断面形状は長方形。足部側は酸化土砂のため不明。	
42	M 93	第160図	鉄製品(鍛造品)釘	15	掘立柱建物13	2.5	1.0	0.8	2.9	2	錆化( )	体部から足部が欠落した頭折れ釘破片。頭部は左側に広がった平頭で、作りはやや粗い。体部の横断面形状は長方形。	
43	M 94	第160図	鉄製品(鍛造品)釘?	15	掘立柱建物13	3.1	1.4	1.1	4.9	2	錆化( )	酸化土砂に覆われた釘状不明品。下手側端部には方形断面をした破面が露出する。径は約3mm。その部分以外は全く不明となる。	
44	M 101	第162図	鉄製品(鍛造品)釘	15	掘立柱建物15	6.6	1.5	1.5	10.1	2	錆化( )	二片に割れている頭折れ釘。頭部は構成No.42と似て、左側に突出する平頭。体部の横断面形状は方形となる。足部は細く延びており、ほぼ方形。表面には酸化土砂が厚い。	
45	M 18	第162図	椀形鍛冶滓(極小)	15	P 487	3.4	2.5	1.5	19.2	3	なし	やや扁平な椀形鍛冶滓の側部破片。側部二面が破面となる。上面が平気味で下面はわずかな凹凸あり。滓質は緻密で流動性が高い。	
46	M 17	第126図	鉄製品(鍛造品)薄板状不明品	15	P 487	3.3	1.6	1.0	5.2	3	錆化( )	上面を酸化土砂で覆われた薄板状不明品破片。厚みは約2mmを測る。平板で厚さがほぼ一定のため、刀子類ではない。側部二面が破面となっている。	
47	M 81	第148図	椀形鍛冶滓(極小)	15	遺構外(段1・2)	3.0	2.2	2.0	19.0	1	なし	側部に小破面を残す、小塊状の椀形鍛冶滓破片。上面は平気味で、側部は小破面が連続する。滓質はやや緻密。	
48	M 82	第148図	椀形鍛冶滓(中、含鉄)	15	遺構外(段1・2)	5.1	3.3	3.7	83.5	5	錆化( )	3.8cmほどの厚みをもった、中型椀形鍛冶滓の中核部から側部破片。左側部が主破面となる。右側部下面も破面の可能性が高い。上面が平気味で下面は皿状。含鉄部は右側部上手側の中核部。	
49	M 79	第148図	鉄製品(鍛造品)釘	15	遺構外(段1・2)	3.8	1.0	0.9	3.1	4	錆化( )	頭部を欠く釘の体部から側部にかけての破片。横断面形状は方形。側部側端部がわずかに曲がっている。	
50	M 78	第148図	鉄製品(鍛造品)釘	15	遺構外(段1・2)	3.4	1.1	1.1	6.4	5	錆化( )	酸化土砂に覆われた頭折れ釘の破片。下手側には破面が露出。頭部は酸化土砂に覆われ、形状ははっきりしない。	
51	M 80	第148図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	遺構外(段1・2)	8.7	1.9	1.7	34.0	2	錆化( )	両端部が破面となった、やや大ぶりの棒状不明品。横断面形状がわずかに長方形である。長さ8.6cmの間に横断面形状の変化がなく、角棒状となっている。なんらかの工具の一部か。	
52	M 77	第148図	鉄製品(鍛造品)鉄鍋	15	遺構外(段1・2)	4.3	5.6	1.7	57.0	2	錆化( )	厚い酸化物に覆われた、有段の鉄鍋口縁部破片。左右の側部が破面となっている。上手側端部は有段部分で、体部から少なくとも8cmほど斜上方に広がった後、再度立ち上がる。体部の厚みは3mm強を測る。特に凸線、沈線はなし。	
53	M 56	第141図	椀形鍛冶滓(中)	15	大畦群1・溝29・30	6.2	3.8	2.9	69.0	2	なし	中型の椀形鍛冶滓の側部寄り破片。左側部と右側部上手側は破面となる。下手側部はほぼ生きており、比較的立ち上がり急。上面は緩やかな平坦で下面は皿状。	
54	M 62	第143図	椀形鍛冶滓(中)	15	包含層(層)	8.5	8.9	3.7	294.0	2	錆化( )	完形に近い正円形の平面形をもつ中型の椀形鍛冶滓。右下手側側部のみが破面となる。滓部はまとまりがよく、側面から下面はきれいな椀形をなす。上面は緩やかに窪み、左寄りには、羽口の頸部に由来する粘土質溶着物が乗っている。構成No.55と基本的には類似。	
55	M 49	第137図	椀形鍛冶滓(中、含鉄)	15	畠3	8.5	8.2	2.5	257.0	3	錆化( )	肩部下面に小破面を残す完形に近い整った形状の椀形鍛冶滓。平面形は不整形で、側面から下面は椀形となる。上面は丸味をもって凹み、下面は鍛冶口の炉床土に接している。上面右端部に突出する瘤状の部分と中央付近が含鉄部となる。滓質は緻密で気孔有。	
56	M 34	第34図	椀形鍛冶滓(極小)	15	畠1	3.8	3.1	1.8	27.2	3	なし	上面の一部に粘土質の滓が固着した、極小の椀形鍛冶滓。肩部2ヶ所に4つの破面を残す以外は、完形に近い。右側面から下面がきれいな椀形で、左側部が乱れている。	
57	M 47	第137図	椀形鍛冶滓(極小、含鉄)	15	畠3	3.7	3.4	1.9	32.6	3	錆化( )	薄い酸化土砂に覆われた極小の椀形鍛冶滓破片。左側部が破面の可能性。上面と右側部が生きている。滓質はやや密度が低く、含鉄部は上面寄りの芯部。	
58	M 48	第138図	椀形鍛冶滓(極小、含鉄)	15	畠3	4.3	3.1	2.1	33.2	2	錆化( )	左側部から下面が破面となった極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。上面は大きな波状で右側部から下面は椀形を示す。含鉄部は、下面中央寄りの芯部。	
59	M 51	第137図	鍛冶滓(含鉄)	15	畠3	3.1	2.3	2.5	18.8	3	錆化( )	厚い酸化土砂に覆われた、含鉄の鍛冶滓片。上手側には新しい破面が露出し、滓部と、錆化により小さな中空部となった含鉄部が露出する。上面がわずかに平気味。	
60	M 19	第131図	鍛冶滓(含鉄)	15	水田1	3.2	2.8	1.4	23.6	2	錆化( )	鍛冶剥片を含む酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓。形状的には上面と右側部が生きており、左側部が破面となる可能性あり。	
61	M 52	第137図	流動滓	15	畠3	1.5	2.1	1.3	9.4	1	なし	上面から上手側の側面に流動単位が残る、緻密な流動滓破片。側面3面と下面の8割方が破面となっている。滓質は緻密で中層に気孔の密集部が確認される。滓表皮は平滑で、暗紫紅色を示す。	
62	M 35	第133図	流動滓	15	畠1	3.2	6.1	1.7	55.5	2	なし	緻密な流動性の良い流動滓破片。上面が生きており、側面は横方向へ広がる大型の気孔と破面からなる。上面はほぼ平坦で下面は緩やかな波状。わずかに木炭痕が確認される。	
63	M 37	第133図	流動滓	15	畠1	8.7	4.7	1.8	126.0	2	なし	上面に木炭痕と流動状の自然面を持つ流動滓破片。側面には上手側の一部を除き小破面が連続する。扁平で上面には滓が重層したためか、光沢のある剥離面が目立つ。下面は不規則な塊状で、還元色の炉壁土や炉壁由来の塊が点々と残る。滓質は緻密で、気孔は部位により密度の差が激しい。構成No.61から63とNo.13並びにNo.113は鍛冶系の滓としては特異で、むしろ製錬系の滓の可能性を残している。	
64	C 9	第131図	羽口(鍛冶)	15	水田1	5.3	5.4	3.9	83.0	1	なし	鍛冶羽口の体部破片。肉厚が3.3cmと厚く、比較的太めの羽口を窺わせる。外面には先端部寄りの被熱を示す灰色の部分と薄い黒色ガラス質滓が残る。胎土は、わずかに初級やスサを混じえる強い粘土質。	
65	M 28	第133図	鉄製品(鍛造品)薄板状不明品	15	畠1	3.5	1.4	0.6	5.3	3	錆化( )	横方向に長手の薄板状不明品。幅は1cm前後で、厚みは3mm程度と推定される。はっきりとした刃部は確認できず、全体に左方向に向かい薄くなっていく。刀子等の未成品の可能性もあり。	
66	M 43	第136図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	畠3	3.9	1.2	1.0	7.6	3	錆化( )	酸化土砂に覆われた棒状不明品。下手側の端部がわずかに曲がっている。鉄製品自体の破面が露出せず、断面形状は不明。	
67	M 39	第134図	鉄製品(鍛造品)刀子?	15	畠2	3.5	1.5	1.2	6.8	3	錆化( )	左側部が破面となる刀子状不明品。横断面形状はやや扁平で、刀子の刃部から芯部にかけての破片の可能性あり。ただし、酸化土砂のためはっきりしない。	

表46 門前上屋敷遺跡鉄関連遺物観察表(3)

構成No	報告書No	挿図	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	X線
						長さ	幅	厚さ					
68	M 20	第131図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	水田 1	4.0	1.3	1.0	5.5	3	錆化( )	両端部に破面が露出する棒状不明品。横断面は6mmほどの方柱状。	
69	M 29	第133図	鉄製品(鍛造品)釘?	15	畠 1	6.0	1.4	1.1	13.8	3	錆化( )	酸化土砂に覆われた釘状の鉄製品。頭部と推定される突出部が斜方向に確認され、足部側は約2mmのところでは折れ曲がっている。酸化土砂中には鉄器表面の酸化物が露出する。	
70	M 25	第132図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	水田 2	6.3	1.6	1.3	24.2	3	錆化( )	前者とやや似た棒状不明品。酸化土砂が厚く不明点が多い。頭部は平頭状で足部先端は曲がる。下手側端部には方形の横断面形をもつ小破面が露出する。	
71	M 26	第132図	鉄製品釘状鉄製品	15	畠 3	4.4	2.5	1.6	16.2	2	錆化( )	酸化土砂に覆われた釘状の鉄製品。横断面は方形で、約5mm程度の厚さを測る。	
72	M 44	第136図	鉄製品(鍛造品)薄板状不明品	15	畠 3	3.8	1.9	0.9	9.8	3	錆化( )	酸化土砂に覆われた薄板状不明品。扁平で鍛造様様の外面をもつが、磁着傾向から鉄製品とした。右側部が破面の可能性をもつ。	
73	M 45	第136図	鉄製品(鍛造品)鎌	15	畠 1	5.0	3.8	0.8	22.2	3	錆化( )	鉄鎌の刃部。身幅は3cm程度で刃部は弧状となる。背幅の厚みは3mm弱。短軸方向の断面形はわずかに反り気味。左右が破面となり、左側は新しい破面。	
74	M 31	第133図	鉄製品(鍛造品)鎌	15	水田 2	5.0	3.1	1.0	22.6	5	H( )	鉄鎌の先端部片。現状の最大身幅は2.9cm。背側がきれいな弧状で、刃部は荒れている。右側部が破面。表面には瘤状の酸化土砂と磁が残る。	
75	M 27	第132図	鉄製品(鍛造品)鉄鍋(体部又は注口部)	15	水田 1	2.9	1.4	0.8	5.6	3	錆化( )	5mmほどの厚みをもつ、鉄鍋の体部又は注口部破片。左右の側面と下手側が明瞭な破面となる。上手側は薄くなって収束するが、破面の種類である。短軸方向に沿っているため、構成No78と同様の注口部の破片の可能性あり。	
76	M 22	第132図	鉄製品(鍛造品)鍋(体部)	15	水田 2	2.6	3.8	0.9	13.0	3	錆化( )	厚さ3.5mm前後を測る鉄鍋体部破片。外周部は4面とも破面となる。内面の剥離が進んでおり、被熱した底部片の可能性もある。	
77	M 40	第134図	鉄製品(鍛造品)鍋(体部)	15	畠 2	3.2	3.6	1.7	25.6	3	錆化( )	厚い酸化土砂に覆われた鍋体部破片。外周部は4面とも破面となる。裏面は緩やかな皿状で、構成No75と同様、底部破片の可能性もある。厚みは4mm前後と薄い。	
78	M 64	第163図	鉄製品(鍛造品)鍋(注口部)	15	包含層(1層)	3.4	3.8	1.6	22.8	3	錆化( )	右側部に棒状の破面が露出する鉄鍋注口部破片。下手側の端部は直線状に途切れた自然面で、残る3方が破面となる。現状で幅2.8cm以上の注口部となる。右側に向かつて絞られており、現状での長さは3.8cmを測る。厚みは約4.5mm。	
79	M 21	第131図	鉄製品(鍛造品)鍋(体部)	15	水田 1	4.1	4.8	2.0	29.8	2	錆化( )	厚い酸化土砂に覆われた鉄鍋体部破片。下手側の中央部にわずかに地の鉄部がのぞき、全体に緩やかな反りをもつ。	
80	M 23	第131図	鉄製品(鍛造品)鍋(口縁部)	15	水田 1	4.1	5.2	2.8	60.5	2	錆化( )	ふ厚い酸化土砂に覆われた鍋口縁部破片。体部が9mmほどの厚みをもち、上手側に残る口縁部は斜め上方に立ち上がる。それ以下の体部は酸化土砂のためはつきりしない。比較的大型の鉄鍋片が。	
81	M 63	第143図	鉄製品(鍛造品)鍋(底部)?	15	包含層(1層)	4.9	5.2	2.8	71.5	3	錆化( )	扁平板状の鉄鍋底部破片。上面は半分以上が瘤状の酸化土砂に覆われており、反りは認められない。側面の3方は破面の可能性が残るが、不明瞭。	
82	M 32	第133図	鉄製品(鍛造品)鍋(口縁部)	15	畠 1	6.7	5.6	1.4	99.5	3	錆化( )	有段の鉄鍋口縁部破片。左右の側面と下面は破面となり、上手側の口縁部は生きている。斜めに立ち上がる上端部で破面となる。口縁は5cmほど外側に広がった後、約2cmの高さで斜め方向に立ち上がる。厚みは口縁部で約6mm。	
83	M 24	第131図	鉄製品(鍛造品)鍋(体部)	15	水田 1	8.2	5.4	2.4	122.0	1	錆化( )	上下面を分厚い酸化土砂に覆われた鉄鍋体部破片。緩やかな反りをもち、右側の端部に破面が露出する。厚みは約2mmから6mm強と、厚みが不均一。上手側が薄い。	
84	M 33	第133図	鉄製品(鍛造品)鍋(体部から底部)	15	畠 1	9.0	8.7	4.3	269.0	2	錆化( )	塊状の酸化土砂に覆われ、一見、椀形鍛冶滓の外観をもつ鉄鍋破片。体部から底部にかけての破片が、ほぼ完形。中央部で逆「く」の字状に折れ曲がっており、体部と底部の境をなす部分と推定される。下手側の端部には破面が露出してあり、厚みは4mmを測る。	
85	M 38	第133図	椀形鍛冶滓(中)	15	畠 1	10.3	8.7	5.2	647.0	2	なし	中型のずっしりとした重さをもつ椀形鍛冶滓。平面、不整半円形で左側は直線状となる。下手側の肩部に小破面が巡るが、比較的完形に近い。下手側が肥厚して、上手側から右方向に向かい徐々に薄くなっていく。滓質は緻密で、下面は鍛冶炉の炉床土に接する。本遺跡では最大重量をもつ椀形鍛冶滓。	
86	M 72	第144図	椀形鍛冶滓(小、含鉄)	15	包含層(1層)	6.1	5.8	3.4	127.0	3	錆化( )	ふ厚い酸化土砂に覆われた小型の椀形鍛冶滓。滓部は下手側に露出してあり、やや平板状。滓の肩部と推定されるが、他の部分は不明。	
87	M 61	第141図	椀形鍛冶滓(小、含鉄)	15	大畦畔1・溝29・30	6.5	5.1	4.5	168.0	5	錆化( )	ふ厚い酸化土砂に覆われ、2片に割れている含鉄の椀形鍛冶滓。外周部はオニイタ状の酸化物に覆われており、滓内部は含鉄部の錆化のため、黒色や茶褐色となっている。それ以外は表面が露出せず不明となる。	
88	M 58	第141図	椀形鍛冶滓(極小)	15	大畦畔1・溝29・30	5.3	3.0	2.5	43.6	2	なし	上手横方向に扁平な含鉄部をもつ極小の椀形鍛冶滓。下手側の端部に小さな破面があるが、ほぼ完形。上面は平坦気味で、側面は部位により変化が激しい。滓量の少ない鍛錬鍛冶滓が。	
89	M 57	第141図	椀形鍛冶滓	15	大畦畔1・溝29・30	3.5	4.3	1.9	32.8	2	なし	全体に扁平で、右方向に向かい広がっている極小の椀形鍛冶滓。左側部のみが小破面となり、全体形状は不規則な椀形。上面には凹凸があるが、窪みの部分は木炭痕。	
90	M 36	第133図	鍛冶滓	15	畠 1	2.8	2.0	1.5	8.0	1	なし	酸化土砂に覆われた小塊状の鍛冶滓。上手側が膨らんでおり、下面の中央部は結晶が発達してキラキラと輝いている。	
91	M 59	第141図	鍛冶滓	15	大畦畔1・溝29・30	3.0	2.5	1.9	13.8	4	なし	厚い酸化土砂に覆われた小塊状の鍛冶滓。下手側の端部には小範囲で滓部が露出するものの、密度が低い。	
92	C 11	第144図	羽口(鍛冶)	15	包含層(1層)	4.3	3.3	2.2	24.8	1	なし	細身の鍛冶羽口の先端部破片。羽口の頸部分で、下面には垂れが生じている。通風孔部の壁面に薄く滓が張り付く。身厚は1.1cm前後。左側の破面には粘土単位を示す層状の肌分かれあり。	
93	M 60	第141図	粘土質溶解物	15	大畦畔1・溝29・30	5.3	5.6	2.7	61.5	3	なし	やや不規則な椀形の粘土質溶解物。側面には小破面が連続する。全体形状は右方向に開く椀状。滓質は下半が鍛冶滓で、上半が羽口の頸部由来する粘土質溶解物。	
94	M 30	第133図	鉄製品(鍛造品)釘?	15	畠 1	2.0	0.7	0.7	1.8	3	錆化( )	弧状に折れ曲がった釘状不明品。下手側が破面で、横断面はやや長方形を示す。上手側の端部が頭部様にも見えるが、はつきりしない。	
95	M 68	第144図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	包含層(1層)	3.6	1.4	0.7	5.2	2	錆化( )	上手側に破面が露出する棒状不明品。下手側の端部は細くなっており、釘の可能性も残る。上手側の横断面は幅5mmほどの長方形気味。	
96	M 67	第144図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	包含層(1層)	3.8	1.1	0.7	4.2	2	錆化( )	前者と同様、上手側が破面となった棒状不明品。前者と似ているが搭合はしない。下手側の端部が徐々に細くなっており、釘の可能性もあり、芯部が中空ではなく、細い方柱状に突出する。	
97	M 54	第141図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	15	大畦畔1・溝29・30	3.5	1.4	1.3	6.9	1	錆化( )	黄褐色の酸化土砂に覆われ、逆「し」字状に折れ曲がった棒状不明品。下手側の端部には5mmほどの径をもった方形の破面が露出する。芯部は錆化して反ける。	
98	M 69	第144図	鉄製品(鍛造品)楔状不明品	15	包含層(1層)	5.3	1.7	1.5	13.2	3	錆化( )	厚い酸化土砂に覆われた楔状不明品。上手側が扁平な板状で、下手側の端部は細くなって収束する。	
99	M 65	第141図	鉄製品(鍛造品)刀子?	15	包含層(1層)	3.4	1.8	1.3	6.6	3	錆化( )	幅1.15cmほどの細身の刀子状不明品。右側部に新しい破面が露出し、左側部も破面となる。背側の厚みは1.5mmから2mm程度。比較的直刃で使い減りは少ない。	
100	M 53	第141図	鉄製品(鍛造品)刀?	15	大畦畔1・溝29・30	6.2	3.1	1.3	26.8	1	錆化( )	やや小ぶりの刀又は大刀子破片。左側部には破面が露出する。身幅は現状で1.9cm前後、背側の厚みは3mmを測る。右側に向かい幅が狭くなっているが、茎部とは判断できない。上面右側が黄褐色の酸化土砂で膨らむものの、刃部は直線状。	



表48 門前上屋敷遺跡鉄関連遺物観察表(5)

構成No	報告書No	挿図	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	X線
						長さ	幅	厚さ					
138	M 149	第193図	鉄製品(鍛造品)釘?	16	包含層(層)	4.0	1.4	1.3	13.6	3	錆化( )	厚い酸化土砂に覆われた釘状不明品。下手側は明らかな破面で、径5mmほどの方形の破面が露出する。頭部の存否は不明。	
139	M 150	第193図	鉄製品(鍛造品)釘?	16	包含層(層)	6.9	2.2	1.8	28.6	3	錆化( )	酸化土砂が上手側に大きく固着した釘状不明品。下手側頭部には頭部寄りを示す方形断面の破面が顔を出している。径は3.5mm大。上手側に向かい模様にも見えるが、酸化土砂によるものかもしれない。	
140	M 147	第193図	鉄製品(鍛造品)鍋(体部)	16	包含層(層)	3.1	4.7	0.4	17.2	3	錆化( )	層状の酸化土砂に覆われた鉄鍋体部。厚みは3mm前後で比較的薄い。わずかに反りがあり、底部破片の可能性も残されている。側部は全面破面。	
141	M 152	第193図	鍛冶滓(含鉄)	16	包含層(層)	2.4	1.6	1.3	8.5	2	錆化( )	小塊状の丸みをもった鍛冶滓片。左側部が主破面で、内部には気孔が数多い。右側面から下面は丸みをもった碗形で、本来の形状を示す。	
142	M 151	第193図	炉壁(溶解炉?含鉄)	16	包含層(層)	2.9	2.7	1.7	12.0	3	H( )	内面がわずかに溶化して、上手側の端部が水平に途切れた炉壁片。下半部には灰褐色に被熱した石が含まれている。やや性格不明の遺物で、上端は鑄型様の接合痕、見かけは土製のようにも見えるが、内部に金属を残している。一種の溶解炉の破片かもしれない。	
143	M 154	第209図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	17	土坑 70	6.5	1.2	0.4	7.4	2	錆化( )	二片に割れている棒状不明品。横断面はやや長方形で釘状とはならない。表面には酸化土砂が厚く、ひび割れも目立つ。	

表49 門前鎮守山城跡鉄関連遺物観察表(1)

構成No	報告書No	挿図	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	X線
						長さ	幅	厚さ					
1	M 5	第257図	鉄製品(鍛造品)鉄錠		段状遺構 5	9.6	1.5	1.2	78.5	6	L( )	幅1.8cmほどの鉄錠頭部。上手側は方形の横断面形で、下手側は長方形の横断面形となる。やや反りがあり、下手側頭部は刃部様。上手側は破面の可能性を持つ。X線写真撮影の結果、鉄錠の頭部と判明。	
2	M 6	第259図	碗形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	10.9	9.3	3.5	336.0	2	なし	平面、不整形をした中型の碗形鍛冶滓。側部がとびとびに欠けているので、全体形状は生きている。下面上手側は滓がすれて二段となる。	
3	M 7	第259図	碗形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	4.4	3.8	2.7	51.0	3	なし	小型の碗形鍛冶滓の中核部から側部破片。側部三方が破面となる。滓質はやや密度が低い。上面中央部を中心に鍛冶滓片が多量に固着する。	
4	M 8	第259図	碗形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	7.7	7.2	3.4	145.0	3	なし	側部に近い小型の碗形鍛冶滓。肩部に小破面あり、下手側は含鉄部周辺の酸化土砂。滓質はやや密度が低い。	
5	M 9	第259図	碗形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	5.0	3.8	3.2	58.0	6	錆化( )	大きな放射割れや黒錆のじむ小型の碗形鍛冶滓破片。中核部から側部にかけての破片。表面の酸化土砂中には黒色で薄手の鍛冶滓片が目立つ。	
6	M 10	第259図	碗形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	6.0	4.1	3.2	81.0	3	錆化( )	中型の碗形鍛冶滓の半欠品。左側部は破面の可能性が大。酸化土砂のおおわれ、小さなひび割れが発達し始めている。酸化土砂中には、粉炭と鍛冶滓片を含む。	
7	M 11	第259図	碗形鍛冶滓	C3 トレンチ	段状遺構 6	3.1	2.7	2.4	15.0	3	なし	極小の碗形鍛冶滓の側端部破片。破面は上手側と左側の側部。表面には薄く酸化土砂が付着し、鍛冶滓片も含まれている。	
8	M 12	第259図	碗形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	4.0	4.1	1.5	18.4	1	なし	三方に突出部を持つ偏平で極小の碗形鍛冶滓。左側部から上手側端部が小破面となる。粘土質で磁着は極めて弱い。わずかに鍛冶滓片が固着する。	
9	M 13	第259図	碗形鍛冶滓	C3	段状遺構 6	4.5	4.3	2.1	31.2	2	なし	平面、不整形をした極小の碗形鍛冶滓。ほぼ完形品で、上面上手側には羽口先の溶解物の小範囲で乗っている。下面は芯部の偏った碗形で、中央部には木炭痕による凹みが残る。	
10	M 14	第259図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	2.8	2.5	2.2	13.8	3	なし	酸化土砂に厚く覆われた、鍛冶滓または鉄製品破片。形状から前者と推定した。酸化土砂中には粉炭が目立つ。	
11	M 15	第259図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	3.8	2.6	2.2	17.2	3	なし	下面に突出する酸化土砂中に1.1cm大の鉄床石表面破片が固着する鍛冶滓。側面から下面は小さな木炭痕により凹凸が生じている。破面は上手側の側部のみ。上面左上手にはコブ状の錆がくれあり。	
12	M 16	第259図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	1.9	1.7	1.3	4.8	4	錆化( )	小塊状の含鉄の鍛冶滓片。側部は破面と推定される。酸化土砂の表面には細かい放射割れあり。極小の碗形鍛冶滓の破片の可能性もあり。	
13	M 17	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	2.4	2.0	1.4	9.0	6	錆化( )	やや前者と似た外観をもつ含鉄の鍛冶滓片。側部三方が破面の可能性を持ち、立ち上がり急となる。表面を酸化土砂が覆い、放射割れあり。	
14	M 18	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	2.1	2.7	1.7	9.1	4	錆化( )	下手に貝殻状の錆がくれが広がる含鉄の鍛冶滓片。上下面に沿って酸化土砂が広がり、側部は破面の可能性が高い。	
15	M 19	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	3.8	2.3	1.7	11.0	5	錆化( )	偏平な板状の鍛冶滓片または鉄製品破片。上手側の端部は貝殻状の錆がくれで、残る表面には酸化土砂が厚い。酸化土砂中には薄手で黒色や青光りする鍛冶滓片が多量に含まれている。	
16	M 20	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	3.3	2.2	2.2	14.8	5	錆化( )	やや厚い酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓片。酸化土砂中には薄手の鍛冶滓片が多量に含まれている。粉炭も目立つ。上下面のみ薄皮状の黄褐色土が付着する。	
17	M 21	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	2.1	2.5	2.2	16.0	3	錆化( )	短輪側の側面二面に破片が露出した含鉄の鍛冶滓。表面は黄褐色の酸化土砂に覆われ、内部から放射割れが発達している。右側部の酸化土砂中には7mm大の木炭片が突出している。	
18	M 22	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	2.8	2.4	2.0	20.8	5	錆化( )	丸みを持った小塊状の鍛冶滓。ほぼ完形品で上面全体は平坦気味、右側部から上手側は碗形で、残る二方が立ち上がり急となる。下面には放射割れと黒錆のじむあり。	
19	M 23	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	4.0	2.7	2.1	21.8	4	錆化( )	厚い酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓または鉄製品。上手側はコブ状の酸化土砂に覆われており、下手側はやや突出する。表面の酸化土砂中には、まばらに鍛冶滓片や粉炭が含まれている。	
20	M 24	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	3.5	2.6	2.4	23.8	5	錆化( )	厚い酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓。全体の形状は構成No.18と似る。ほぼ完形品と推定される。側面からは強い碗形を呈する。酸化土砂中にはわずかな鍛冶滓片と粉炭を含む。	
21	M 25	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	3.3	2.1	1.7	9.9	4	H( )	黒錆がにじみ端部各所から貝殻状錆がくれが発達した含鉄の鍛冶滓。完形品の可能性が高く、鉄部主体とみられる。鍛冶滓塊系遺物の錆化の進んだ資料の可能性大。	
22	M 26	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	2.4	1.6	1.3	5.1	4	錆化( )	右側部に小釘状の鉄製品の突出部をもつ鍛冶滓片。主体部分は粉炭主体の滓部に覆われており、鍛冶滓中で生成された可能性大。小釘の横断面形はほぼ方形。	
23	M 27	第260図	鍛冶滓	C3	段状遺構 6	2.9	1.4	1.8	6.6	2	錆化( )	上半部は鍛冶滓部分で、下面中央部が小釘状となった鍛冶滓片。上下面が生きており、側部は全面破面の可能性を持つ。小型の碗形鍛冶滓の中核部破片の可能性もあり。この場合には、小釘は滓の下面沿いに落ち込んでいることになる。釘は頭部を残さず、体部から足部まで。	
24	M 28	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	3.2	2.5	2.1	12.6	4	なし	2cmほどの厚みをもつ再結合滓破片。上面沿いは黄褐色土主体で、下半は薄手の鍛冶滓片や粉炭を多量に含む。上手側の下端部には、1.8mm大の粒状滓が顔を出している。側部は基本的に破面。	
25	M 29	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	7.4	5.6	5.0	143.0	6	なし	最大厚が4.6cmほどの再結合滓破片。上面のみ生きており、側面から下面は全面破面となる。前者と同様上面沿いのみが黄褐色土で、以下は多量の鍛冶滓片主体の再結合滓となる。再結合の遺物は細かい滓片や粉炭の滓に加えて、2mm大の真性な粒状滓が確認できる。鍛冶滓片は3mm大で厚みは総体に薄い。鍛冶滓片は黒色から青光りするものまで様々。	
26	M 30	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	4.4	2.0	1.3	8.1	4	錆化( )	偏平棒状の再結合滓破片。側部から下面部は全面破面。下手側の側面に1.5mmほどの厚みをもつ鉄製品様の突出部が露出しているが、鉄製品ではなくやや密度の高い再結合滓層と推測される。再結合の主体は様々な色調の鍛冶滓片。	



表50 門前鎮守山城跡鉄関連遺物観察表(2)

構成No	報告書No	挿図	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	X線
						長さ	幅	厚さ					
27	M 31	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	2.8	2.9	1.5	7.4	6	錆化( )	側部が破面となった滓主体の再結合滓破片。破面は層状で、下面には多量の鍛造剥片が顔を出している。鍛造剥片の比率は、8割方が黒褐色のもので残りが青光りするもの。	
28	M 32	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	2.5	3.2	1.8	12.6	4	錆化( )	粉炭主体の再結合滓破片。上面は薄皮状の酸化土砂で下半は再結合滓層となる。側部の8割方は破面。粉炭は4mm大以下。	
29	M 33	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	4.0	3.6	2.3	20.0	3	なし	下面に多量の鍛造剥片と鉄床石表皮破片が固着した再結合滓破片。側部は全面破面で、上半部は褐色の粘質土となる。下面に固着する鉄床石は、3.75 x 2.8 x 0.4 cmを測る。右の表面には青光りする鍛造剥片が付着する。	
30	M 34	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	3.8	3.2	1.7	23.0	4	錆化( )	やや比重の高い再結合滓破片。または鍛冶滓を内部に含んだ再結合滓の可能性もある。厚いガン状の横断面形で、中央部が最も肥厚。再結合の主体は粉炭で、まばらに鍛造剥片も含まれている。比重の高さは芯部の密度が高いためか。	
31	M 35	第260図	再結合滓	C3	段状遺構 6	4.6	3.3	2.5	32.0	5	錆化( )	細かい薄片や鍛造剥片、5mm大前後の大きさを持つ鉄床石の薄片が上下面に目立つ再結合滓破片。右側部を除く側部三方が破面となる。上下面が逆転する可能性もあり。	
32	M 36		粒状滓	C3	段状遺構 6				1,317			総量 1,317 g 出土。球形で、表面には凹凸を有する。	
33	M 37		鍛造剥片	C3	段状遺構 6				21,082			総量 21,082 g 出土。平滑で光沢を持つ。不純物を含む。	
34	M 38	第260図	鉄製品(鍛造品)釘?	C3	段状遺構 6	2.7	0.8	0.6	4.0	2	錆化( )	上手側の端部が逆L字状に折れ曲がった釘破片。足部側の先端部は欠けて、放射割れあり。	
35	M 39	第260図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	C3	段状遺構 6	2.7	1.0	1.0	3.9	3	錆化( )	鉄片状の棒状不明品。上面のみ平坦で、側部から下面部は酸化土砂に覆われている。短軸側の両端部は貝殻状の錆がくずれのため変形している。	
36	M 40	第260図	鉄製品(鍛造品)頭折れ釘	C3	段状遺構 6	6.0	0.7	0.6	13.8	6	H( )	小さく折れ曲がった頭部を持つ、頭折れ釘の体部から頭部にかけての破片。横断面形はやや長方形となる。足部先端部は欠落し、扁平な錆がくずれが突出する。頭部は平坦ではなく、斜めに傾く。	
37	M 41	第260図	鉄製品(鍛造品)小形鋳?	C3	段状遺構 6	5.4	1.3	0.9	19.2	7	H( )	頭部が小さく四方に広がる小型の鋳。体部の横断面形はやや長方形を示す。刃部先端は錆がくれとなってしまっている。現状では酸化土砂のため刃部側が広がっているように見えるが、本来は広がりをもちない可能性が高い。頭部は平頭で、下面が大きな錆がくれに覆われる。	
38	M 42	第260図	鉄製品(鍛造品)棒状不明品	C3	段状遺構 6	5.2	2.0	2.0	34.8	8	M( )	放射割れや酸化土砂に覆われた棒状不明品。上下面が平坦気味で、側部形状は不明。上面上手側には2.3 cm大の鉄床石の表面破片が再結合している。下手側から上手側に向かいやや太くなる外観を持ち、未成品の可能性も高い。	
39	M 43	第261図	鉄製品(鍛造品)板状不明品	C3	段状遺構 6	3.0	5.3	1.4	25.2	6	H( )	酸化土砂に覆われた左右方向に長手の板状鉄製品。左側部は急激に途切れであり、破面の可能性が高い。形状的には鎌の刃部か。	
40	C1	第261図	炉壁(鍛冶炉)	C3	段状遺構 6	5.2	4.2	1.6	11.8	1	なし	内部に鍛冶滓が薄く固着した鍛冶炉の炉壁破片。滓は黒色で、1 cm大の木炭痕あり。炉壁胎土は初殻をわずかにまじえる粘土質である。	
41	C2	第261図	炉壁(鍛冶炉)	C3	段状遺構 6	4.0	4.9	2.3	18.8	1	なし	内面が溶化して黒色ガラス質の垂れが生じている鍛冶炉の炉壁片。側面は破面となる。外面は灰色に被熱している。胎土は粘土質で、わずかに初殻をまじえている。	
42	C3	第261図	羽口(鍛冶)	C3	段状遺構 6	3.6	2.9	2.1	16.4	1	なし	鍛冶羽口の、先端部破片。通風孔径は1.7 cm前後と小ぶり。外面先端部は黒色ガラス化している。外形は比較的小ぶり。胎土は砂質で構成 No.47 とやや近い。	
43	C4	第261図	羽口(鍛冶)	C3	段状遺構 6	5.3	3.3	1.9	35.8	2	なし	鍛冶羽口の先端部破片。前者より径が大きく、先端部の溶損も進んでいる。肉厚は2.5 cm程か。胎土はスコリアをまじえる粘土質で、初殻も確認される。	
44	C5	第261図	羽口(鍛冶)	C3	段状遺構 6	4.0	5.1	2.5	30.2	1	なし	鍛冶羽口の先端部破片。外形は小ぶりで、肉厚は1.9 cm前後と薄い。先端部の溶化は前二者と異なり、体部側に向かってガラス質が広がる。胎土は植物繊維入りの粘土質。	
45	C6	第261図	羽口(鍛冶)	C3	段状遺構 6	4.6	4.8	1.5	25.4	1	なし	鍛冶羽口の先端部破片。肉厚が薄く、外周部の径はやや太めとなる。残存部位は頸部分。胎土はスコリアをまじえた、ややざつくりした粘土質。	
46	C7	第261図	羽口(鍛冶)	C3	段状遺構 6	4.4	3.9	0.7	27.4	1	なし	鍛冶羽口の先端部寄りの体部破片。先端部はひび割れから欠け落ちたまま再使用されている。通風孔部は欠落するが、肉厚は1.5 cm強と薄い。	
47	C8	第261図	羽口(鍛冶)	C3	段状遺構 6	4.7	4.0	1.4	30.8	1	なし	鍛冶羽口の先端部寄りの体部破片。通風孔部は残るが、横断面形は丸くない。胎土は細かい植物繊維を含むものでやや砂質。	
48	C9	第261図	羽口(鍛冶)	C3	段状遺構 6	3.4	4.5	1.3	28.4	1	なし	鍛冶羽口の基部寄りの体部破片。肉厚は2 cmを超える。側部は破面で、右側の破面には層状の構造が残る。	
49	C10	第261図	粘土質溶解物	C3	段状遺構 6	3.5	2.8	1.8	8.6	1	なし	外周部が溶化した粘土質溶解物。表面の一部には濃褐色の錆が取り巻き、下面は碗形となる。鍛造剥片が一点固着する。	
50	C11	第261図	粘土質溶解物	C3	段状遺構 6	6.4	4.0	2.9	24.2	2	なし	上面の左右で質感の異なる粘土質溶解物破片。右側は錆色が強く、左側は黒色となる。上面と右側部から下手にかけてが生きており、他は全面破面。1 cm大以下の粘土塊の集合体のような外観を呈す。羽口頸部で生成か。	
51	S 1	第261図	鉄床石	C3	段状遺構 6	6.1	4.8	1.1	67.0	1	なし	表面の一部に鍛造剥片が固着した鉄床石表面破片。肩部破片と推定され、他に二片を伴っている。右質は安山岩。	
52	S 2	第261図	鉄床石	C3	段状遺構 6	9.3	9.3	3.5	314.0	2	なし	鉄床石の破片と推定される石片。上面と側部二方が自然面で下面が破面となる。右下手側の肩部にも破面あり。鉄床石とすれば、使用面は逆面か。右質は安山岩。	
53	M 2	第245図	椀形鍛冶滓	E4	盛土遺構 1 下層包含層	4.7	3.6	3.0	67.0	5	錆化( )	小型の椀形鍛冶滓の中核部から側部破片。上下面と上手側の側部が生きており、残る側部は破面となる。肩部はやや乱れた形状で、含鉄部は下面沿い。	
54	M 44	第271図	鉄製品(鍛造品)釘	C 2	石組遺構 1	5.5	0.7	0.5	17.4	4	錆化( )	上手側に平頭の釘頭を残す釘破片。横断面形は長方形で、やや歪んでいる。足部先端は小さく欠落する。未使用または未成品の可能性あり。	